
「喜んで。」

なく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「喜んで。」

【Nコード】

N2146M

【作者名】

なく

【あらすじ】

世間一般でいう駄目男の紀夫の話。

紀夫はどちらかというとダメ人間だ。顔もかつこよくないし特技もないし運動も苦手で頭も悪い。5人居る兄弟の中で一番出来損ないの弟だ。長男は東大出のエリートで大手企業のNo.1営業マン。次男は国立大出の総合病院に勤める一流医者。三男は企業を立ち上げて成功した敏腕社長。四男は美大出の画家で、最近有名な新人賞を取ったばかり。そんなエリート達の中で紀夫はただ1人のダメ人間だった。母親似で美形の兄達に比べ、紀夫だけは平凡の、何処にでも居そうな、取り立てるほどでもない顔形をしていた。紀夫は自分がダメ人間で、幾ら努力しても兄達には勝てないことを知っていた。兄どころか世界中の誰にも勝つことは出来ないだろうと思っていた。紀夫は不器用だ。料理や洗濯などの家事も出来ないし、花を育てれば3日ともたず枯らせてしまう。兄達の食器を割ってしまったこともあるし、借りた本を汚してしまうこともしばしばであった。兄達にお前はどうしようもないダメ人間だと怒られても、紀夫は頷いて反省していた。どうやら自分はダメ人間だが、だからと言って兄達に迷惑を掛けてもいけないと思った。紀夫は何とか仕事をしようと、働き口を探し回った。面接はとおつてもすぐに使えない奴だとレッテルを張られて追い出されることが多かったが、それでも紀夫は頑張った。兄達のようになれるとは思わなかったが、兄達のようになりたかった。紀夫は4人の兄達を心から尊敬し、慕っていた。自分とは出来が違う兄達を羨みこそすれ、妬むことは無かった。紀夫は何とか働き口を見つけ、そこでまた頑張ろうとしていた時、1人の女性に出会った。彼女はとても美しく、聡明で、気品のある女性だった。紀夫は同じ職場で働く彼女に憧れ、いつしか彼女を見ているだけで幸せになれる自分に気が付いた。彼女は上司に叱られる自分を慰め、励ましてくれた。それだけでも紀夫は嬉しかった。彼女は紀夫に親しくしてくれ、いつしか家に遊びに来るまでの仲にな

った。兄達は紀夫が友達を連れて来たことに驚いたが、何よりも彼女の美しさに腰を抜かした。時折家に遊びに来る彼女に兄達も惹かれ、やがて交際を申し込むようになった。しかし彼女はそれをごとく断り、以前のように紀夫と親しくしていた。そこで兄達は、彼女は紀夫に気があるのではないかと思い、紀夫に彼女に交際を申し込むように言った。紀夫はそんな滅相もない、彼女が自分なんかを選ぶはずがない、と首を振ったが、とにかく訊いてみると迫る兄達を振り切ることが出来ずに、とうとう彼女に交際を申し込んだ。彼女はいつものように優しく笑い、「喜んで」と頷いた。紀夫はその言葉を聞いて、それは何といい言葉だろうと思った。彼女は喜んでくれている。それは言うほうも言われるほうも、何て勇気付けられる言葉なのだろうと思った。今まで生きてきた自分の全てが肯定されたような気すらした。やがて紀夫は彼女と結婚し、彼女は家に住むようになった。紀夫は仕事をますます張り切り、どんなに失敗してもめげずに立ち上がった。それも全てあの時彼女がくれた一言のおかげであった。「喜んで」何といい言葉だろう。これからは自分も、誰かに何かを頼まれた時にはそう返事することにしよう。それから紀夫は、何かを頼まれる度に「喜んで」と返事をするようになった。接客業であった紀夫は、それだけで客達に好感を持たれるようになった。仕事の覚えは遅いが、それでも丁寧に一生懸命やる紀夫を、いつしか上司も認めるようになった。そんなある日、紀夫がいつもより早く仕事から帰ると、リビングから話し声がした。どうやら妻と兄が話しているようだ。アルコールのにおいがするから、きっと酒を飲んでいるのだろう。兄も彼女もそれなりにお酒が好きなので、時々お酒を呑みながら談笑しているのを紀夫は知っていた。紀夫は酒が飲めないので、素面のままで話に加わり、時々つまみを作ってやつたりしていた。楽しげな笑い声に、紀夫はきつと面白い話をしているのだろうと思い、そつと中を伺ってみた。どうやら今夜は兄達が全員集まっているようだ。

「でもさー、今だから訊くけど、ほんと何で紀夫と結婚したんだ？

俺達の中から幾らでも選べたのにさ」

「幸せな結婚の条件って知ってる？女は自分より不細工な男と結婚したほうが幸せになれるのよ」

「うわあ、ヒデー女だな。じゃあ、結婚じゃなくて、付き合うとしたら誰とがいい？」

「そんなの訊くなよ、兄さんに決まってるだろ。つうか、二人共もう出来てんだぜ」

「え、マジかよ？紀夫にバレたらまずいんじゃない？」

「大丈夫よ、ちゃんと避妊してるもの」

「ヒデー女！兄貴もグルだったのかよ」

そう言いながら笑っている次兄は、ふとツマミがなくなったことに気が付き、台所から何か持ってきて来ようと立ち上がった。そしてリビングから出ようと顔を上げた時、そこに立っていた紀夫に気が付いた。

全てを紀夫に知られた妻は、流石にこのまま生活することは出来な
いと思い、紀夫に離婚してくれるようにと頼んだ。それを聞いた紀
夫は、穏やかに言った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2146m/>

「喜んで。」

2010年12月30日06時18分発行